

礪波護著『隋唐佛教文物史論考』

(法蔵館 2016年4月 A5判 4+421+13頁 9,000円+税)

江川 式部

中国魏晋南北朝隋唐史の研究者で、著者の論著にふれたことがないという者はいないのではあるまいか。著者はかつて『唐代政治社会史研究』(同朋舎出版、1986年2月)で唐宋時代間の社会変革を綿密な制度研究によって裏付け、また『中国貴族制社会の研究』(川勝義雄と共編著、京都大学人文科学研究所、1987年3月)や『中国中世の文物』(著者編著、京都大学人文科学研究所、1993年3月)等を世に問い、気鋭の研究者らと共に、文物を用いた実証研究の実例と手法とを示して、学界の研究啓発を先導して来られた。本書は専著の論文集としては、先の『唐代政治社会史研究』に次ぐ第二冊目であり、同じく法蔵館から刊行された『隋唐都城財政史論考』(2016年9月)とあわせて、『唐代政治社会史研究』以後の諸論文をほぼ網羅している。著者の論著をいろはに研究の道に入った評者はじめ後学にとって、講演録や各論集の序文など、ほとんど入手困難であった諸論が一書にまとめられたことを、何より有難く感じている人も多いだろう。

本書の目次構成は以下のとおりである。I~IVの4部に大きく分けられており、各部には3~5章の論説と関連する2~3の短文コラムが織り込まれていて、初学者にも研究者にも配慮された構成となっている。『唐代政治社会史研究』以後に執筆された論著の、いわば輯本としてまとめられた本書には、全体として一貫した課題が掲げられているわけではないため、重厚感や統一感に欠けるところがあるのは否めない。短文コラムはそれを補って前後関係をつなぐための、著者の配慮でもある(本書420頁)。

第I部 隋唐の仏教と国家

第一章 天寿国と重興仏法の菩薩天子と

第二章 法琳の事蹟にみる唐初の仏教・道教と国家

第三章 嵩岳少林寺碑考

コラム1 嵩岳少林寺碑

第四章 玄秘塔碑考

第五章 文物に現れた北朝隋唐の仏教

コラム2 塚本善隆著『大石仏』

コラム3 京都大学人文科学研究所の宗教研究室

附章 礼敬問題—東晋から唐代まで—

第II部 祀天神と釈奠

第一章 中国の天神・雷神と日本の天神信仰

第二章 唐代の釈奠

コラム1 寒食展墓の開始

第三章 釈迦空『死者の書』と唐代の宗教

附章 「両晋時代から大唐世界帝国へ」補遺

コラム2 E・H・シェーファー著 『サマルカンドの金の桃—唐代の異国文物の研究—』序言

第III部 隋唐の石刻

第一章 唐代長安の石刻—その社会的・政治的背景—

コラム1 決定版『雲岡石窟』—世界に誇る石窟寺院研究の金字塔—

第二章 京都大学所蔵の唐墓誌

第三章 魏徵撰の李密墓誌銘—石刻と文集との間—

コラム2 魏徵の李密墓誌銘

第IV部 遣隋使と遣唐使

第一章 遣隋使と遣唐使

第二章 遣唐使の二つの墓誌—美努岡萬と井真成—

コラム1 円仁—日本最初の大師「慈覚大師」の見聞記—

コラム2 「漢俳」第一号に寄せて

第三章 唐代の過所と公驗

附章 入唐僧と旅行記

初出一覧 / 後記 / 索引 / 中文目次 / 英文目次

各論に目を移すと、文物を研究史料として使用するのに先立ち、まず徹底した史料批判が行われていることがわかる。以下、本書各章を追いながら内容をみていくこととするが、紙幅の関係から、コラムについては評を控えた。

第I部では隋唐時代の仏教とそれに関わる石刻史料とが取り上げられる。

第一章は、聖徳太子の死を悼んで妃の橘大郎女が作らせた「天寿国繡帳」(奈良県中宮寺所蔵)の「天寿国」の解釈をめぐる提唱された、「天寿国は阿弥陀浄土であって、聖徳太子が憧れた中国の菩薩天子は隋の煬帝である」という説への批判論文である。「天寿国=阿弥陀浄土」説が史料的根拠としたのは、三井文庫蔵の敦煌写経『大方広仏華嚴經 卷第四六』(北魏延昌2年写本)の奥書に、「大隨開皇三年歲在癸卯五月十五日……又願亡父母託生西方天寿国、常聞正法……」とある宋・紹演の発願文であった。しかしその後、

赤尾榮慶・石塚晴道・富田淳らの三井文庫蔵敦煌写經の全面的な調査研究の結果、この写經が偽經と判定され、「天寿国」の史料的根拠に援用できないことが明白となった。本章ではこの偽經をめぐる「天寿国」論争が詳細に整理されており、海西の菩薩天子＝煬帝とする諸説を論駁して、聖徳太子が607年に「重ねて仏法を興した海西の菩薩天子」と書いて送った国書の相手が隋文帝であったことを論証する。

第二章は、隋～唐初期における朝廷の、儒・仏・道をめぐる宗教政策の変遷を跡付けた論考である。廃仏を行った北周の後を承けて建国を果たした隋文帝は、国家経営にあたって宗教緩和の方針と各種の宗教優遇策を打ち出し、人心を収攬していった。しかしその一方で、国家権力が宗教に及ぼす影響を熟知する者たちの間では、自者擁護・他者排斥の論争が為政者を挟んで続けられた。本章では、仏教排斥の論を張った道教者傅奕と、これに対抗した仏僧法琳との、長期にわたる論争の経緯が、彦棕の著した『法琳別伝』（『大正新脩大藏經』50巻・史伝部2所収）を基本史料として、丹念に考察されている。本章読後に評者が考えさせられたのは、仏・道二教の主張如何よりむしろ、両者を翻弄した当時の王法、すなわち国家権力のあり方である。為政者側の意図や都合が先行した太宗朝にあって、意見拝聴が建前となっていたことを呑み込めないまま行われた両者の議論には虚無感を覚える。著者は、論争の経緯を詳述した『法琳別伝』がのち唐朝で禁書とされたのは、法琳が論争の中で皇室李氏のルーツを老子ではなく拓跋達闍とした論証が、唐朝の禁忌に触れたからだと述べている。禁書とされた本書が伝写され伝えられてきたことの背景に、両者にとっては無意味に終わった議論の、歴史的な意義がうかがえるように思うのである。

第三章は、唐・裴灌撰書「嵩岳少林寺碑」（河南省登封県少室山所在）立碑の背景をめぐる考察である。本碑は開元16年（728）7月の建立だが、碑陽上截には武徳4年（621）4月に当時の秦王李世民が、王世充軍の平定に協力した少林寺の僧衆らに与えた教書が刻され、碑陰には武徳8年（625）2月に少林寺に対して田地と碾磑を賜与した際の教書などが刻されている。このため立碑にかかる背後関係の考察以前に、公文書の形式を知りうる史料として、また社会経済関連の史料としても、従来多くの研究者に注目されてきた。著者は本論文で、李世民の秦王時代の教書が何ゆえ玄宗の開元16年に刻碑されたのかという根本的な問題に対して、これが開元年間に行われた宇文融による括戸政策への対処のために建てられた碑であることを論証した。そして同政策下において寺觀の莊園が没収の対象とされた際、少林寺は玄宗の特別措置をとりつけてこれを回避し、以後も現状を維持できるようその次第を刻碑したのだという。考察は更に続く。選者である裴灌が張説の側近であり、括戸政策を主導した宇文融とは政敵であったことを指摘、李世民の教書をはじめとした一連の公文書が刻碑された背景を読み解くのである。撰文は、

裴灌が吏部尚書であった開元11年夏～14年冬までに行われたとし、開元16年7月15日の立碑と時期がずれることについては、大碑ゆえ完成までに時間がかかったとする一方で、玄宗よりの碑額下賜に貢献のあった、僧一行の初盆会に合わせたものではないかとの見解も加えている。著者は、第一節に「これら最近の論著を参考にすることによって……建碑の縁起を納得づくで説明しうようになった」と述べている。多方面からの先行研究の積み重ねを待ちながら、自説を長らく寝かせたうえで執筆された論考である。一文物史料に時間をかけて向き合うことの必要性は、研究者誰しもが感じることだが、次々と新出史料が公開される昨今、こうした辛抱は存外難しいように思われる。

第四章は、唐後半期の会昌元年（841）に建てられた裴休撰『玄秘塔碑』についての論考である。本碑の碑陽は柳公権の書とあって、唐碑として知らぬ者はないほど有名な碑文であるが、著者は前章の「嵩岳少林寺碑考」で得られた碑文検討の際の方法論、すなわち碑陽・碑陰とを一体のものとしてとらえるやり方で、この名碑の性格を究明する。検討されたのは碑陰上截の「敕内莊宅使牒」と「比丘正言疏」であり、会昌元年の立碑後、武宗による廃仏を経て、十年後の大中6年（852）に追刻された。これら碑陰の刻文は、寺僧正言が大中5年に官有地の莊宅の払い下げを受けた際のものであり、官文書とその由来記（疏）を本碑に追刻し、将来再び廃仏があった際に寺領が没収されぬよう「防風林の役割を期待したに違いない」とする。本碑が廃仏時に破壊されなかったのは、碑陽の法師端甫の事跡に、彼と順宗・徳宗との深い関係が記されていたからであろう。著者の論をふまえるならば、「敕内莊宅使牒」は、この今上皇帝の手の及ばない碑の陰に刻されることで、後世に伝えられるよう企図されたとも考えられる。なお、碑陽の刻字を行った玉冊官の邵建和・建初兄弟のうち、弟の邵建初は860年の慶王李沂墓誌、870年の韓国夫人徳妃墓誌など、皇族墓誌の刻字も行っていることを、評者の付言としておく。

第五章は、大谷大学で行われた仏教史学会での講演録である。著者が大阪にある真宗大谷派究竟寺の次男として生まれたこと、京都大学で師事した宮崎市定に卒業論文の題目の相談に行った際、「仏教史はおもしろいからやめておけと、もっとほかのことをして、あとから仏教のことをしたらどうか、仏教のことをはじめにやるとおもしろくなって、ほかのことが何も見えなくなるからと言われて、あっさり引き下がった」というエピソードや、その後著者が「制度史的な」仏教研究を手掛けるに至った経緯が語られる。近年の中国仏教史研究は、それまでの政治的懸念と自己規制から解放されて「活気が予想される」とし、『中華大藏經』106巻の編纂をその契機とみる。後半部分には、先の「海西の菩薩天子」が隋文帝であるという持説のほか、石刻資料の拓影を研究に使用する際、真拓・摸刻拓に注意を払うべきこと、唐代のとくに開元期の史料に「京都」とある場合は「京」と「都」すなわち長安と洛陽の両方をさす場合を考慮すべきこと、などが述べ

られる。摸刻に基づく拓本は、文字の改ざんが行われない限りは、史料としての参照に問題はないと評者は考える。しかし高句麗『広開土王碑』の例もあるように、取拓時の碑面の状況を読者が知る意味もあることから、これを影印公刊する際には、できるだけ修正のない真拓を掲示し、摸刻拓や修正拓があれば添えて掲げるのが望ましいと思う。なお、本講演にて著者より例として批判を受けた氣賀澤保規には「金仙公主と房山石經をめぐる諸問題—礪波護氏の批判に答えて」（『駿台史学』139、2010年3月）と題する反批判論文があり、あわせて紹介しておく。

附章は、東晋から唐代までの、王権と仏教者との間に生じた、僧尼拝君、僧尼拝父母、父母拝僧尼等の、いわゆる「礼敬問題」をめぐる学説史の整理である。

第Ⅱ部は、仏教以外の信仰・宗教に関する諸論である。

第一章は、日本の天神である菅原道真を入口に、中国の天神・雷神と日本の天神信仰に関する研究が祖述される。とくに「天神」と漢字表記される神霊の性質は、地域・時代・民族によって異なることに注意を喚起している点が重要であろう。既に日本の「鬼」と中国の「鬼」とが別物であることを承知する者には周知だが、一般的にみて漢字文化圏ならではの誤解の原因になりやすいところである。

第二章は、栃木県足利学校の釈奠祭礼で行われた講演の講演録である。唐代ではまだ孟子に対する尊崇はなく、また唐初の釈奠では周公・孔子を祀っていたものが、太宗のときに孔子・顔回を祀るようになったこと、また国学に孔子廟堂が建設され虞世南「孔子廟堂碑」が建てられたこと、しかしこの間に来華した日本人遣唐使らは長安で儒学を学ぶことはなく、日本人が始めて長安の孔子廟を参詣したのは開元5年(717)であること、などが述べられる。後半では伊藤東涯『制度通』巻11に基づき唐制(中国の制度沿革)と「本朝(日本)之制」とが紹介される。著者には『制度通』1・2(伊藤東涯著、礪波護・森華校訂、平凡社東洋文庫754・755、2006年)もあるので参照されたい。

第三章は、2010年に京都高倉会館で行われた講演の講演録。釈迦空(折口信夫の法名)が『死者の書』及び「死者の書・続編」を執筆した動機を究明した安藤礼二氏の論を紹介しながら、そこにエリザベス・アンナ・ゴルドン夫人—大秦景教流行中国碑—景教—当麻寺というつながりのあったことを説く。

附章は、晋～唐代研究における近年の重要な発見についての紹介。青海省都蘭県にある吐谷渾古墓群から出土した大量の絹織物によって、いわゆるシルクロードの「青海の道」の存在が確認され、太原近郊で見つかった北齊婁叡墓と隋虞弘墓、西安で出土した北周安伽・史君・康業墓によって来華ソグド人の軌跡が明らかとなった。またトルファンのバダム古墓群からは大量の古文書が新たに発見され、アスターナ、カラホージャに続く第三のトルファン文書として注目を集めていることなどが述べられる。

第Ⅲ部は、隋唐時代の図碑・銘・儒教石經・題記・銀鋌・墓誌など、著者がこれまでで研究材料としてきたさまざまな文物史料に関する諸論である。

第一章では、まず「長安城図碑」から、朝廷(皇帝、政治)と市場(皇后、経済)という陽陰バランスの理念に基づいた都城配置が想定できること、また太倉出土とされる銘・拓本を紹介する。以下、儒学テキストを刻して太学に建てられた「開成石經」、北京房山雲居寺に埋納されていた仏教石經と「貞観八年題記」、唐天宝年間に税金の代わりとして用いられた「信安郡税山」銘の銀鋌、本書第Ⅰ部第四章に詳述された「玄秘塔碑」とその碑陰に刻された「敕内莊宅使牒」、漢文にペルシア文字が併記された晩唐の「蘇諒妻馬氏墓誌」、法門寺地宮出土の「監送真身使随真身供養道具及金銀宝器衣物帳碑(衣物帳碑)」、唐太宗の八番目の子供である越王李貞の墓誌、などが紹介されている。

第二章は、京都大学所蔵(誌石所蔵)の唐墓誌の紹介である。「呂買墓誌・蓋」(650年10月)、「段会墓誌」(652年11月)、「斛斯君夫人索氏墓誌」(652年11月)、「斛斯師德墓誌・蓋」(661年8月)、「斛斯祥墓誌・蓋」(662年)、「崔府君夫人鄭氏合祔墓誌」(817年7月)の6点で、このほかに五代後晋の墓誌が1点あり、全部で7点、いずれも羅振玉の寄贈であるという。本章ではこのうち、652年の「段会墓誌」と、817年の「崔府君夫人鄭氏合祔墓誌」とが拓影つきで詳述されている。

第三章は、墓誌を歴史研究史料として使用する者にとっては必読の一文である。取り上げられるのは、1976年に河南省浚県で出土した唐・魏徵撰「李密墓誌銘」である。誌主の李密は西魏の柱国將軍李弼の曾孫として生まれ、のち群雄の一人であった河南の翟讓の配下となって反乱軍を率いたが、618年に唐に降ったのち逃亡を企てて殺害された人物である。墓誌の撰者である魏徵は、唐に降った李密に従い、皇太子李建成の側近となるが、玄武門の変によって政権を取った李世民に起用されて以後は諫官として活躍した。魏徵がかつての主であった李密のために撰じた墓誌銘は、その文集に収められていたものが『文苑英華』巻948に「唐故邢国公李密墓誌銘并序」として収載されており、この原文となる墓誌銘の実物が発見されたのである。著者は『文苑英華』にみえる墓誌文と実際の誌文とを比較して、その相違点を検討する。そして出土した誌石には、李密のかつての部下で埋葬に関わった人物として徐世勣(李勣)のほか柳德義・薛宝・杜才幹の3人の名前が挙げられていたが、文集を引く『文苑英華』では「徐世勣等」とのみ書かれ、3人の名が削除されていたことに着目、これは撰者の魏徵が「三人が誌主の李密と親密な関係であった事実を抹消し、本人や親族に何らかの累が及ぶのを回避しようと腐心した糊塗の跡」であると述べる。唐代には墓誌が文学ジャンルのひとつとされ、唐人文集にも墓誌文が多く収録されている。一方で、近年陸続と墓誌の実物が発見され、文集収載の墓誌文と実物との比較が可能となる事例も出てきている。本論文はその先駆

けとなるものであり、墓誌の現物をタイムカプセルとして理解することの重要性を喚起してくれるのである。

第IV部では、遣隋使・遣唐使に関する論考を収載する。

第一章は、著者が2004年に九州大学で行った講演の講演録である。倭国改め日本国が唐の冊封を受けていなかったこと、また本書第I部第一章で論じられた、海西の菩薩天子は隋文帝であるとする著者の論の紹介もあるが、とくに遣唐使が意図的に拒絶し将来しなかった文化として、著者が道教を指摘している点はやはり気になる。日本が道教移入を避けた事実は、つとに指摘されるところであるが、その理由ははっきりしない。伝わらなかったものについての研究は、これからであろう。

第二章は、二つの遣唐使墓誌についての紹介である。2004年10月に中国西安市の郊外で遣唐日本人「井真成」の墓誌が出土して話題となったが、著者はいま一つの史料として奈良県平群郡萩原村から出土して現在東京国立博物館に所蔵されている「美努岡萬」の銅板墓誌を指摘する。

第三章は、唐代に用いられた旅行証明書である過所・公驗について、網羅的に検討を加えた論考である。日本に将来された実物としては、滋賀県の三井寺（園城寺）に伝わる過所2件が有名だが、本章では北白川宮家旧蔵で現在東京国立博物館所蔵となっている公驗8通と台州帖1通を、藤枝晃から譲り受けた写真とともに紹介しており、閲覧の便に富む内容となっている。

附章は、入唐僧に関連する諸文献の紹介で、章末に「参考文献資料」一覧を付す。

本書各部・各章の所見は以上のとおりである。本評の冒頭で、本書には「一貫した課題が掲げられているわけではない」と書いたが、文物を研究史料として扱う際、一千年を経てモノとして伝えられてきたことの意味に向き合い、制作者・継承者の想いを汲もうとする研究姿勢が、本書には通底しているように思う。

2016年4月25日刊行の本書に続き、同年9月6日には『隋唐都城財政史論考』が出版された。この2冊に収められなかったより一般的な内容の文章は、同年10月13日に刊行された『敦煌から奈良・京都へ』、2017年6月18日刊行の『鏡鑑としての中国の歴史』に豊富なカラー図版とともに収載されている。以上の刊行日にはいずれも意味があるとのことである。合わせてご紹介させていただき、本評の筆を擱くこととしたい。

西脇常記著『中國古典時代の文書の世界 —トルファン文書の整理と研究—』

(知泉書館、2016年8月、A5判、410頁 9,000円＋税)

岩本篤志

はじめに

本書は、中国学とくに中国思想史分野で多数の著書を公刊してきた著者による中国新疆の吐魯番出土の古文献（以下、著者の表記にしたがい、「トルファン」、「トルファン文書」をもちいる）に関する研究書である。本書で主に扱われる資料は、ドイツ学術調査隊が1902年から14年の間に4回にわたって中央アジアから持ち帰ったトルファン文書であり、それらは第二次世界大戦の破壊をくぐり抜け、東西ドイツが統一した後により本格的研究がはじめられた。著者のこれまでの著作のあとがきなどによれば、当初はヨーロッパに関する学問を志したが、まもなく中国を研究分野として選び、1960年代に西ドイツ・ミュンヘン大学に留学、その後の中国思想史研究の端緒を得たという。またベルリンの壁崩壊後にもドイツを訪れ、かつて内陸アジアから探検隊が持ち来た未整理の多数の出土資料に出会い、その整理と研究に関わるようになったということである。そして本書の刊行前にトルファン文書に関する著書を少なくとも2冊（後述）、また関係する目録や報告書類を多数公刊してこられた。

本書の内容について、第一印象を記すと、多岐にわたる研究の最前線が要領よく説明されており、得るところが多いと感じた。題材は「トルファン文書」と限定されているが、各種思想分野にとどまらず、資料が保管されているドイツやロシア、フィンランドなどの各国の事情、版本や写本といった形態に至るまで、多岐にわたる内容が扱われている。そしてそれらに関わる研究史が整理された上で、著者の関心と論点が明解に示されているのである。

本書評は、とくに仏典の研究に通暁していない者でも、また中国西域の出土文献に関心のない者にも、本書の概要と見所がわかりやすくなるようつとめることにした。

では、次に目次に沿って内容を紹介していこう。